

誠意、謝罪、贖罪

大津 隆文

子供の頃いたずらをしたり嘘をついた時は、ゴメンナサイと心から謝るように教えられた。社会人になってからも仕事でのミスは、誠心誠意謝れば大抵許してもらえた。許してくれない人は周りから心が狭いと言われたりした。

四十年以上前に米国に赴任した時、現地の弁護士から、こちらでは誠意というのはお金で量るもの、つまりいくら出すかということですよ、と聞いて驚いた。謝るだけでは済まないのだ。アイアムソーリーと気安く言ってはいけないのだ。

ヤンキース球場に初めて車で行った時、駐車場が満杯で困って番人に訊いたところ Show me your sincerity と言われ、成る程と一ドル札を数枚渡すと空きスペースを教えしてくれた。誠意というのはお金であることがよく分かった

通常のトラブルは謝罪してお金を払えば解決に至る。でも謝罪やお金では相手が納得しない場合はどうしたらいいか。「死んだ子を返してほしい」という親の要求に応える術はない。自分は誠意を尽くし責任は果たしたと見切れれば済むのか。法的責任はないがなんとか相手の気持を癒やす方法を探すのか。

いくら謝っても消えることはないのは嘘も同じだ。政治家は国民に絶対嘘は言わない覚悟を持ってほしい。昔の武士なら武士に二言はないと切腹して責任をとる覚悟があった。

贖罪ということだと思えば『恩讐の彼方に』だ。人殺しの罪を償うために三十年かけて隧道を掘る僧、敵討ちに来た武士も僧の一途な姿に打たれ彼を赦すという話だ。

もう一つは一九六七年英国で起きたプロヒューモ事件だ。陸軍大臣であったプロヒューモ氏は、(ソ連大使館員と親しい) コールガールとの関係について、性的関係を否定した議会での釈明が虚偽と判明し職を辞した。その後氏はロンドンの貧民街の慈善事業に身を投じた。台所の皿洗い、床掃除から呑んだくれのアル中患者の世話も厭わなかったという。時を経て氏は社会奉仕活動家として再評価されるに至った。

責任をとるといふのはそういうことかと感銘を受けた。